

西南戦争で陸軍が用いたラッパ信号と「喇叭暗号」を巡る混乱

奥中 康人

文化政策学部 芸術文化学科

本稿は、国立公文書館アジア歴史資料センターのデジタルアーカイブを用いて、西南戦争（明治十年）に関係する陸軍のラッパ信号の用い方を分析することを目的としている。同アーカイブを「喇叭」等のキーワードで検索し、抽出された約三〇〇件のデータは、楽器としてのラッパについて、ラッパ手について、ラッパ信号についてのデータに分類することができる。とくにラッパ信号を中心に分析を進めると、数多くのフランスのラッパ信号が用いられたことや、戦争が終盤となった九月になつてから数曲のマーチを練習していたことが明らかになっただけでなく、「喇叭暗号」という特殊な用法が存在したことがわかった。

ラッパ暗号とは、あらかじめ定められたラッパ信号を問答形式で交わすことによつて敵・味方を識別する用法である。しかしながら、資料から読み取れるのは、ラッパ暗号が記載された手帳や文書が敵の手に渡り、何度も改正を余儀なくされたという失態である。ラッパ暗号の運用には問題はあったものの、総じてラッパ手たちは数多くのラッパ信号を吹奏していたようであり、それまでのラッパ教育が順調であつたことがうかがえる。

はじめに

明治四年（一八七一）に創設された陸軍では、当初フランスのラッパ信号を用いたことが知られている。すでに筆者は、明治十七年頃に書き記されたとみられる偕行文庫（靖国神社）所蔵のラッパ譜を調査した結果、たしかにフランスのラッパ信号と同じメロディが記されていることを、個々の楽曲に即して確認した^一。陸軍ラッパの「フランス時代」は、明治十八年十二月に『陸海軍喇叭譜』が制定されたことにより、幕を閉じる。

ところで、本稿が問題とするのは、西南戦争において、陸軍はどのようなラッパのメロディを吹いていたのか、ということである。西南戦争は、陸軍が経験する初めての大規模な近代戦であつただけでなく、ラッパを組織的に用いたこと、つまり多くの日本人ラッパ手が――まだ学校教育の唱歌すら存在しなかった頃に――ヨーロッパの金管楽器を吹奏した点で、日本の音楽史（西洋音楽受容の歴史）の観点からも注目し得る出来事である。西南戦争がおこつた明治十年であれば、陸軍のラッパは前述の「フランス時代」にあたるので、フランス式のラッパのメロディが鳴り響いていたであろうことは、容易に推測できる。しかし、それ以上になると、とたんに壁にぶつかってしまう。たとえば、参謀本部陸軍部編纂課による西南戦争の公式記録『征西戦記稿』には、

「喇叭」の文字がいくつか記載されているので、ラッパが鳴つたこと自体は確認できるものの、戦地におけるラッパを巡る具体的な情報には乏しく、詳しいことは何もわからないからである。

ところが、近年整備された国立公文書館のアジア歴史資料センターのデータベースで、「喇叭」をキーワードとして検索することより、これまで掘り取ることができなかったデータを把握することが可能となつた。それらを分析する過程で浮かび上がったのは、「喇叭暗号」という珍しいラッパの使用法である。簡単に言えば、ラッパ信号による合言葉なのだが、そのような軍隊のラッパの使用法は、山口常光の『日本ラッパ史』（一九七三）には出てこない。

本稿では、西南戦争で用いられた陸軍のラッパ信号を概観し、とくに「喇叭暗号」の顛末を紹介することによって、明治十年（一八七七）のラッパ（つまり西洋音楽）受容の一端を明らかにするものである。

分析対象となる資料について

アジア歴史資料センターのデジタルアーカイブで、「喇叭」をキーワードとして検索すると、幕末維新期以降の約八十年間で、五三二二件の資料がヒットをする（二〇二〇年十一月一日現在）^四。これを、明治

十年（一八七七）の資料に絞り込むと九八八件になるので、おおよそ五分の一が、この一年間に偏っていることがわかる。このことは、公開されている防衛庁防衛研究所の全データのなかで、「陸軍省大日記」の「西南戦役」資料群の割合が多いことに起因しているらしく、この時期にラッパが異常に多かったことを示しているわけではないようなのだが、「喇叭」という文字が記されている資料が九八八件存在することは、分析を進めるうえで十分なデータ量である。

しかしながら、これらをよく閲覧してみると、使えない資料も多数含まれていることがわかる。たとえば、各戦地から送られる「戦闘報告表」には、遺失物を記入する欄があり、その欄にあらかじめ印刷された「失喇叭」という文字も検索機能は自動的に拾ってしまう（これだけで二〇〇件くらいある）^五。同じように「戦闘報告書」の死傷者を報告する欄にあらかじめ記されている「喇叭卒」の文字^六、あるいは、個々の兵隊の肩書「喇叭卒」「喇叭手」という文字もヒットする。他にも、「喇叭」の単語はかろうじて読みとれても、それ以外は判読不可能で、文章の意味が汲み取れないような資料、文章自体は判読できても前後の文脈を欠いているため理解できない資料、海軍関係の資料、明治十年であっても西南戦争とは無関係な資料等を省いてゆくと、分析の対象となる資料は約三二〇件になる^七。

西南戦争の頃には、政府軍は有線電信も活用していたが、情報収集のための連絡・通信手段は、まだ伝令（徒歩伝令や騎馬伝令）が運ぶ紙媒体の達書（書状）が多かった。約三二〇件の資料の多くは、九州各地の前線で戦っていた熊本鎮台や各旅団等の組織内の連絡、あるいは組織間の連絡等である。おそらく、多くは控えとして写し残された記録であるとしても^八、詳細な情報に満ちた貴重な一次資料といつてよい^九。もちろん、アジア歴史資料センターには、西南戦争についてのすべての記録が残されているわけではないので（また、すべての出来事が記録されたわけでもない）、ここから明らかにすることは、きわめて限定的なものに過ぎないことも断っておく。

この約三二〇件の資料を精査すると、（一）楽器としてのラッパにつ

いての情報、（二）ラッパ手に関する情報、（三）ラッパ信号、ラッパ譜についての情報の三つにおおよそ分類でき、本稿は（三）を中心に分析を進めるが、その前に、当時の状況をおおよそ知るために、（一）（二）について、少しだけ紹介しておきたい。

西南戦争におけるラッパ（楽器）とラッパ手について

すでに筆者が別稿で明らかにしたように、国産ラッパは遅くとも明治四〇五年頃には製造されていたと考えられる^{一〇}。したがって、西南戦争において陸軍が用いたラッパの多くは、主に国産ラッパ（陸軍ならフランス・モデルの国産ラッパ）であったとみるのが妥当だろう。

分析対象とした約三二〇件のデータのなかで、ラッパ（楽器）に関する資料は、約六十件で、ラッパがどのように運ばれたかを示す資料が多い。たとえば、五月二十五日、広島鎮台参謀の可児春琳「中尉が、馬関（下関）にいる斎藤正言「三少佐に、「喇叭 拾管 総並属具共」を請求すると^{一一}、斎藤少佐は五月二十九日に、滋野清彦「中佐、渡辺央^{一二}中佐に宛てて、電報で「ラッパチツカン（…）ソウソウランヲクリアタシ（喇叭十管（…）早々御送リアリタシ）」と、ラッパ十管を要求している^{一六}。その二日後、

神送第十四号				
送達証				
品目	員数	個数		
歩兵喇叭	拾管	壹箱		
同総	拾条			
同握巻	拾枚			
同掛巾	拾枚			
備考	運輸船	通洲丸		
出港	五月三十一日午前			
前書之通致送達候也				

明治十年五月三十一日 神戸出張十六等出仕緒方康
馬関砲廠 斎藤陸軍少佐殿^{一七}

つまり、神戸から船便で歩兵ラッパ十管と、その付属品（総・握巻・掛巾）が斎藤少佐に届けられた。おそらく大阪（この時期に、滋野・渡辺は大阪にいたと考えられる）の砲兵支廠には、砲兵本廠（東京）で製造されたラッパがストックされていて、神戸へ下関を経由して、可児の配下にある広島鎮台のどこかの部隊に届けられたようだ。

これに類した資料に目を通してゆくと、まとまった数のラッパが必要になったのは、戦闘によってラッパが故障・紛失したからではなく、西南戦争の最中に新たに編成された部隊が必要としているケースが多いことがわかる。次の引用では、六月になってから七十管ものラッパを要求している。

喇叭外三点御渡之義二付伺

一 歩兵喇叭 七拾管

一 同総 七拾条

一 同握巻 百式拾個

一 同拭巾 百式拾個

右八当団諸隊用御渡相成度此段相伺候也

十年六月二十四日 新撰旅団少将東伏見嘉彰

陸軍卿代理少将井田讓^{一八}殿

伺之通 六月廿五日^{一九}

東伏見嘉彰少将が司令長官をつとめた新撰旅団は、陸軍の戦力不足を補うために、政府の召募に応じた巡査（旧藩の士族が多かった）によって構成された。つまり、徴兵に基づいた常備兵ではないため、ラッパが配備されていなかったのである。逆に言うと、ラッパは有っても無くても差し障りのないお飾りの道具ではなく、必需品と認識されていたこともうかがえる。先の広島鎮台参謀の可児春琳が要求した十管についても、

広島鎮台の既存の部隊に対してではなく、新たに召募された部隊のために調達されたラッパかもしれない。

和歌山県では、明治十年四月になって召募された旧藩兵によって遊撃歩兵第五大隊が編成され、それに関する資料の中に、やはりラッパが登場する。

普式喇叭之義過般□御照会置候通和歌山県下ニ於テ製造為致直ニ遊撃歩兵第五大隊ヨリ相渡候^{二〇}

遊撃歩兵第五大隊に続いて、同じ旧和歌山藩兵によって編成された遊撃歩兵第六大隊についてもラッパについての記載がある。

遊撃歩兵第六大隊用喇叭御渡相成度件

一 普魯西式喇叭 拾六挺

但総共

右遊撃歩兵第六大隊用之□前出之品御渡相成度此段相伺候也

明治十年七月二日 陸軍少佐中川審六郎^{二一}

陸軍中将西郷従道殿^{二二}

右の引用文中のラッパが「普式」「普魯西式」であることに注目したい。

明治二年、和歌山藩はプロイセンの軍人カール・ケッペンを雇用し、プロイセン式の兵制に基づいた陸軍を創設していたのだが、ケッペンの指導の下でラッパも製造していた^{二三}。だが、廃藩置県によってこの軍隊は解散した。

明治十年四月、陸軍大阪参謀部で後方支援をしていた鳥尾小弥太^{二四}は、和歌山に出張参謀部を置き、旧藩兵を召募させた。五月には壮兵八〇七人によって遊撃歩兵第五大隊を、六月の第二回壮兵募集では壮兵八五八人によって遊撃歩兵第六大隊を編成した^{二五}。鳥尾は、プロイセン式で訓練をしていた旧藩の兵士たちなら、西南戦争にも役立つと考えたのだ

る。そこで、和歌山で製造されたプロイセンのラッパも再登場することになったらしい^{二六}。遊撃歩兵第六大隊八五八人に對し、ラッパ十六管は、単純計算すると、五十三人につきラッパ一管ということになる。

相当数のラッパが戦地に送られたことは、砲兵本廠から支廠に「砲兵喇叭三百 歩兵喇叭五百」を送る依頼（五月十六日）^{二七}や、「第二次新選旅団」編成のために警視局から陸軍省へ「小銃六千五百挺（一）喇叭二百管」を要求する文書（七月二十三日）^{二八}等からも読み取ることができる。そのため、在庫が少なくなり、八月末には「至急製作」しなければならなくなった。次の資料には、ラッパの製造費と製造数が記されている。

喇叭製作之義二付伺

一 金五千五百九拾五円六拾七錢八厘

但 歩兵喇叭千九百四拾七管製作費

一 金九百一拾七円四拾八錢

但 砲兵喇叭二百六拾二管製作費

右者砲兵本廠貯蔵之分追々減少二付別書之通至急製作為致度御達案相副此段相伺候也

明治十年八月廿七日 第三局長代理 陸軍少佐永持明德^{二九}

陸軍卿代理 陸軍少将井田讓殿

伺之通 八月廿九日^{三〇}

砲兵ラッパの実態については不明な点が多く、歩兵ラッパとどのような違いがあるのかは分からないが、それぞれの製作費を、それぞれの製造数で割ると、歩兵ラッパはおおよそ二円八十錢、砲兵ラッパはおおよそ三円五十錢で、砲兵ラッパのほうがやや高い。

ラッパ手についての資料は、断片的な情報が多く、前後の文脈が欠けていると理解が難しい資料が多い。また、戦死したラッパ手、罪に問われるラッパ手の資料がいくつか存在するものの、そこにラッパ自体についての情報はとくに含まれていない。西南戦争に出征したラッパ手、近

藤與久治^{三一}、佐藤六之助^{三二}（二人とも東京鎮台歩兵第三連隊第三大隊第一中隊の一等喇叭卒）の戦歴を示す資料からは、かれらが各地を転戦した様子を知ることができる（かれらは八ヶ月のあいだに四十一回の戦闘を経験した）が、やはりラッパ自体についての言及はない。

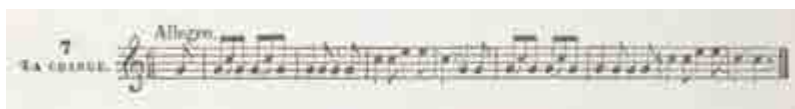
西南戦争におけるラッパ信号

分析の対象とする資料のうち、ラッパ信号が記された資料は約二四〇件で、七割を占める。当時の陸軍はフランスのラッパ譜を用いたので、資料中に「進撃ノ号音」と記されていれば、フランスのラッパ信号「*LA CHARGE*」のメロディ（譜例1）が鳴ったと考えてよい。

しかし、具体的にどのような曲であるかを推測できないケースもある。たとえば、「預メ約定スル処ノ喇叭ヲ吹奏ス」^{三三}と記されていると、ラッパが鳴ったことは確かだが、曲名を特定することはできない。ただ、「喇叭ノ吹号ニ応シ一齋ニ突入」^{三四}という文ならば、ラッパが鳴った後の「突入」の動作から、「*LA CHARGE*」が鳴ったと推測できることもある。全体を俯瞰すると、戦争の記録なので、この「進撃ノ号音」、あるいは類似した表現「進軍喇叭」「前進ノ号音」等のラッパ信号が頻出する。

他に具体的に記されている曲名として、次のようなものがある。

- 「退却ノ合図ヲ吹キ退キ来リ」^{三五}
- 「運動ノ譜ヲ吹奏セシム」^{三六}
- 「休メノ喇叭吹奏」^{三七}
- 「止マレ」^{三八}
- 「打方止メ」^{三九}



（譜例1）Lagard, Adrien, *Méthode de clairon d'ordonnance*, 1869

「気ヲ付テ之喇叭ニテ」^{四〇}
 「臥声（ネロー）」^{四一}
 「立声（ヲキロー）」^{四二}
 「右向ケ」^{四三}
 「左向ケ」^{四四}
 「剣付ケ」^{四五}
 「散兵ノ内半隊集レ」^{四六}
 「曹長呼ビノ喇叭」^{四七}

日本語ではなく、カタカナでフランス語が記載されているものもある。

「ゼテフル」之譜吹奏」^{四八}
 「ラツベル譜」^{四九}
 「ガルダボー譜」^{五〇}
 「ヨーフラン」^{五一}

「ゼテフル」(LA GÉNÉRALE) は非常時の合図として、「ラッベル」(LE RAPPEL) は「集合」、「ガルダボー」(GARDE-À-VOUS) は「気を付け」、「ヨーフラン」(REPEAN) は各連隊や大隊に与えられた個別の「隊号」(個々の隊を示す信号。第一連隊の「ヨーフラン」、第一大隊の「ヨーフラン」等)として用いられた^{五二}。

陸軍ラッパの「フランス時代」(明治四十八年)に使われていたラッパ譜は、野口吉右衛門^{五三}というラッパ手が所持していたラッパ譜(明治九年頃に作成か。宮代町郷土資料館)と、陸軍教導団でラッパを学んだ政府金助^{五四}のラッパ譜(明治十七年に作成か。靖国神社偕行文庫所蔵)等が現存するが、先に列挙したラッパ信号は、たいていこの二冊のラッパ譜に含まれており、且つフランスで使われていたラッパ譜のメロディと基本的には同一である(LA GÉNÉRALE(譜例2)と「ヒチヨ(非常)」(譜例3))。

これらのラッパ信号が記されている文書は、戦況の報告文であったり、



(譜例2) *Règlement du 12 juin 1875 sur les manœuvres de l'infanterie, 1877.*



(譜例3) 野口吉右衛門のラッパ譜 (ca.1876) に収録されている「ヒチヨ(非常)」(宮代町郷土資料館「野口信夫家文書No.24 楽譜綴り」)

実際のな指令や規定であったり、文脈は様々であるものの、そのラッパ信号が鳴った事実を記録したか^{五五}、これからそのラッパ信号が吹奏されることを想定して記したはずである。つまり、こうした文書に、あるラッパ信号のタイトルが記載されているということは、従軍していたラッパ手たちが、それを演奏する能力を持ちあわせていることを前提としていたことを証明している^{五六} (もちろん、後述するように、期待を裏切って、演奏できないこともあったが)。

また、幕末維新期の記録にも散見される「ラツベル」のような定番曲だけでなく、「臥声」「右向ケ」「剣付ケ」のような信号が含まれていることや、記録されなかった事実、残されなかった資料も存在することを考慮すれば、ラッパ手たちは、ここに挙げたよりも多くのレパートリーを持っていたことが推測できる(少なくとも、「打方止メ」や「剣付ケ」を知っているなら、「打方始メ」と「剣取レ」も知っていなければおかしい)。

これらはすべて比較的短く単純な信号音であるが、西南戦争の最終局面の九月十九日になって、行進曲（マルス）やセレモニーのための練習を通知する資料もある。

団長ヨリ許可ヲ受ケ当方面受持戦闘線内ニ於テ昼間左之喇叭ノ譜音
演習為致候間御承知通此旨御通知ニ及置候也

九月十九日

高島五七少佐

中村^{五八} 中佐殿 山内^{五九} 少佐殿 山川^{六〇} 中佐殿

譜号

楽 マルス

坂 マルス

軍隊行軍ノ礼

礼式ノ譜

マルス^{六一}

最初の「楽 マルス」と最後の「マルス」が、どのような行進曲なのかは不明だが、「坂 マルス」は、政府金助のラッパ譜にある「坂（マルス）」、フランスのラッパ譜では「LE PAS DE CHARGE（譜例4）」と思われる^{六一}。八分の六拍子でアレグロ（♩＝150）。楽譜の指示どおりに繰り返せば（ダ・カーポすれば）二十四小節。ラッパ譜としては比較的長い楽曲である。

「軍隊行軍ノ礼」が、政府のラッパ譜にある「軍隊ニ応スル礼式」であるなら、これはフランスのラッパ譜のAUX CHAMPS EN MARCHANT（譜例5）^{六三}になる。四分の二拍子で、繰り返すと二十四小節。「礼式」の名に相応しい華やかな曲である。

「礼式」は、間違いなくフランスのラッパ譜のAUX CHAMPS（譜例6）だろう。

三つの行進曲と二つの礼式曲を練習したのは、別働第二旅団のラッパ



（譜例4）Règlement du 12 juin 1875 sur les manœuvres de l'infanterie, 1877.



（譜例5）Règlement du 12 juin 1875 sur les manœuvres de l'infanterie, 1877.

隊のようだが、おそらく城山の戦い（二十四日）によって西南戦争は終結し、その後、凱旋をする際に、儀式やパレードで吹くことを見越して練習していたとみられる。

ところで、こうしたラッパ譜について具体的な記載がある資料をよく調べてみると、その過半数（約一四〇件）は、ラッパ信号を「喇叭暗号」として用いたことを示す資料であることが判る。

ラッパ暗号

ラッパ暗号とは聞きなれない用語である。簡単に説明をすると、あらかじめ「問」（問号）と「答」（答号）のメロディをそれぞれ決めておき、ラッパ吹奏によってその問答を交わし、戦場において敵・味方を識別するための方法である。ちょうど「山」という問いに対して「川」と答える合言葉と同じ役割を果たす。西南戦争において、そのようにラッパが用いられていたことは、おそらくこれまで音楽史研究において指摘されたことはなく、西南戦争の暗号についての研究である『西南の役と暗号』、あるいは『新編西南戦史』がわずかに言及している程度である^{六四}。次の資料には、ラッパ暗号の具体的な用法がわかりやすく描写されている。八月六日の午後四時、第二旅団のある隊が羽坂村（現在の宮崎県日向市）近くの権現山という場所に到着したところ、正体不明の部隊と遭遇した。

午後第四時八サカ村後口権現山二着ス然ルニハサカ両岸二兵三中隊
程魚登リ川二沿フテ来ルヲ見ル我斥候彼我ヲ識別スル為メ喇叭ノ暗
号ヲ為ス川二沿フノ兵答フニ成規ノ吹奏ヲ以テス故ニ直ニハサカ村
二下リ彼ノ兵即チ別働第二旅団ト互ニ連絡ヲナシ今夜此処ヲ守備



(譜例6) *Règlement du 12 juin 1875 sur les manœuvres de l'infanterie, 1877.*

候^{六五}〔傍点、引用者〕

遠方にいる「兵三中隊」の存在を目視で確認し、「彼我ヲ識別」するために「喇叭ノ暗号」（問号）を吹いたところ、相手から「成規ノ吹奏」（答号）が返ってきたことから、味方（別働第二旅団の部隊）であることが判明したという。わざわざラッパを用いるまでもなく、従来の人の声による合言葉でも十分代用できそうなものだが、人声とラッパでは、音の飛距離に大きな差があり、当然ラッパのほうがはるかに遠方に届く。西南戦争では、両軍とも昔に比べれば射程距離の長いライフルを携行していたため、人の声が聞こえる距離まで近づいてしまうのは、リスクが大きかっただろう。しかし、ラッパであれば、相互に安全な距離を保ったまま、「彼我ヲ識別」をすることが可能になるので、重宝されたのかもしれない。その意味で、ラッパ暗号は近代戦の要求に応じて編み出されたことになる。

しかしながら、資料をさらに分析してみると、政府陸軍はこのラッパ暗号を駆使することで、戦いを有利に進めていったというよりは、むしろその運用を巡って右往左往していたのが実態であった。

五月三十一日、村田大尉の手帳

五月三十一日、豊後路方面（現在の大分県豊後大野市三重町）で、熊本鎮台の村田成礼^{六六}大尉が戦死し、その際、村田が携帯していた手帳が薩軍に奪われてしまった。それは単なる手帳ではなく、「記号」（旗号、旗による敵・味方の識別）並「喇叭暗号」が記された手帳だったので、困ったことになった^{六七}。機密事項である暗号が敵に知られてしまったのは、元も子もない。この一件は、ただちに各地に散らばっている政府軍の全体に知らせなければならないはずだが、堀江芳介^{六八}中佐が政府軍の中樞である軍団参謀に報告したのが六月八日で、一週間以上経過していた。暗号がバレていることに気づいてから、村田大尉の手帳が奪われたことを知ったのかもしれない。

軍団本営（総督本営）の参謀は、報告を受けとったその日のうちに、全軍に通知をしたようだ。軍団本営から第三旅団の三浦梧楼^{六九}少将（当時、人吉の近郊に滞在）に宛てた電報が残っている。

コレマデアイモチキタリソロ。キゴウナラビニラツパンゴウブ
ンゴジニライテゾクニウバワレソロダントケイデソロアイダトリ
アヘズツウチニヨブカワジシヨウセウヘハソノチヨリシキウツウ
チアルベシ^{七〇}。「是迄相用来リ候記号並ニ喇叭暗号豊後路ニ於テ賊
二奪ハレ候段届ケ出候間不取敢通知ニ及フ川路少将ヘハ其地ヨリ至
急通知アルヘシ」^{七一}

この時、第三旅団（人吉方面）の近くには別働第二旅団があり、同様の通知があったと考えられる。ただ、手帳が奪われたことが「トリアヘズツウチ」されただけなので、改正された新しい旗号・ラッパ暗号についての指示がくるまでの間^{七二}、人吉方面だけで対応策を考えなければならなかった。

二日後、別働第二旅団の司令長官、山田顕義^{七三}少将は、同旅団の高嶋信茂に宛てて次のような仮決定を指示した。

相図旗及喇叭問答本日ヨリ当旅団限り仮ニ左ノ通相定施行候条此旨
相達候事

明治十年六月十日 山田少将

高嶋少佐殿

相図旗

問 正面ニテ縦ニ振 答 頭上ニ立ツ

喇叭

問 散兵ノ内半分隊集レ 答 同伏セ^{七四}

この山田少将の「当（別働第二）旅団限り」の仮決定は、ただちに、

高嶋から同旅団の三好成行^{七五}少佐らにも通知され、同時に連携している第三旅団（参謀の牧野毅^{七六}少佐と川村景明^{七七}少佐）にも伝えられた^{七八}。当然、この方面での味方同士の誤射を防ぐためである。この山田少将の素早い対応によって、少なくとも別働第二旅団と第三旅団では、ラッパ暗号を一時的に「散兵ノ内半分隊集レ」と「同伏セ」^{七九}に変更することで当座をしのごことになった。

六月十二日、小郷中尉の手帳

ところが、その二日後の六月十二日、今度は、別働第二旅団で手帳を紛失する事件がおきた。

昨日耳取山哨兵線ニ多人数襲来シ我兵能ク防禦セシモ彈藥尽キ不得
止夜ニ入り其地ヲ引揚旧哨線ニテ防禦セリ〔〕其時喇叭旗相詞ノ
暗号ヲ記シタル手帳ヲ失フタリ依テ当方面限仮リ之暗号ヲ定メタル
ニ付此旨報告ス^{八〇}。（傍点、引用者）

手帳を紛失したのは小郷武^{八一}中尉で^{八二}、翌十三日に中村重遠（別働第二旅団参謀長）から山田顕義少将（別働第二旅団司令長官）にこの件が報告された。そして山田少将は、参軍（政府軍の実質的なトップ）の山縣有朋に、改めて「当方面限りノ」暗号を定めたことを伝えている。ただ、山縣への文書には、どのラッパ譜を暗号とするのかは記されていないが、同日に第三旅団の三浦少将から山田少将への通知に、

旗并ニ喇叭号当分之内当団限り左ノ通相定候間此段申進候也

問 喇叭 答

第三大隊オロフラーム 第一大隊オロフラーム

問 旗 答

大キク丸ク廻ス 一文字横ニ曳ク

六月十三日 三浦少将

山田少将殿^{八三}

と、ラッパ暗号として問「第三大隊オロフフレーム」、答「第一大隊オロフフレーム」を使うことを連絡している（「オロフフレーム」は、「ヨーフラン」(REFRAN)と同じ）。

政府軍は、複数のラッパ暗号が混在する事態になってしまった。豊後路方面と人吉方面は、距離が離れているとはいえ、やはり全軍で統一すべきと考えられたのだろう。六月十七日になって、山縣有朋、山田顕義、三浦梧楼、三好重臣^{八四}、川路利良^{八五}が八代に集まった際の会議で、新しいラッパ暗号が定められ、同日、次の通知が総督本営から各方面に出された。

喇叭暗号記号共別紙之通更ニ相定候条此旨相達候事

六月十七日

総督本営

第三旅団

(…)

喇叭暗号

問 第一連隊

答 第二連隊

右旗八各旅団ニ於テ調製可致尚ホ記号暗号共来ル二十六日ヨリ施行之事^{八六}

右に引用したのは第三旅団への通知だが、第二旅団、第四旅団、別働第二旅団、別働第三旅団にも同様の文書が届けられている。ラッパ暗号（問答）の「問 第一連隊 答 第二連隊」とは、「第一連隊のヨーフラン」「第二連隊のヨーフラン」のことであり、これを全軍共通のラッパ暗号として、二十六日から施行することにしたのである。

ところが、この「第一連隊」「第二連隊」に対してクレームが相次いだ。

第四旅団の司令長官、曾我祐準^{八七}少将は、

第一連隊第二連隊ノ譜号ハ当旅団喇叭手ニ於テハ未熟ニシテ□□難吹分候間今一度之御詮義ヲ以簡易之譜ニ御交換候^{八八}

つまり、ラッパ手には難しくて吹けないので、もう少し易しいラッパ譜にかえてくれと要求した。第二旅団参謀長の野津道貫^{八九}は、

喇叭暗号之義ハ連隊譜ノ如キ新古之区別モ有之喇叭卒中不熟之者モ有之況や一般軍人に於テハ往々不心得之者可有之^{九〇}。

といい、さらに野津は山縣有朋に対して、

別働遊撃隊長村田大尉戦死之節ヨリ豊後地方限り相定之暗号（問右向ケ 答左向ケ）ヲ施行致度^{九一}

と、事実上、ラッパ暗号「第一連隊」「第二連隊」を拒否して、豊後方面で決定した「右向ケ」「左向ケ」を使うと宣言しているのである。

クレームの理由はいくつか考えられる。曾我は^{九二}、ラッパ手の「未熟」を挙げているが、必ずしもラッパ手の責任ではないようだ。これは、連隊のヨーフランの特殊性に起因するからである。たとえば、既出の「第一大隊」や「第三大隊」のヨーフランであれば、ラッパ手は吹奏できた。なぜなら、大隊という組織単位は、どの連隊にも存在し、また、どの連隊でも通用する汎用のラッパ譜——東京の歩兵第一連隊の第一大隊でも、佐倉の歩兵第二連隊の第一大隊でも、同じ「第一大隊のヨーフラン」を——用いたので、たいいていのラッパ手は吹奏する（あるいは聴き覚える）機会があり、諳んじていても不思議ではない。しかし、大隊の上位の組織単位である「連隊」は、それぞれ固有の組織であり、それぞれの連隊に与えられたヨーフランは汎用性がない。つまり、歩兵第一連隊に属していないラッパ手は、「第一連隊のヨーフラン」を吹く（聴く）機会は稀なので、「未熟」であっても仕方がない。さらに「況や一般軍人に於テハ往々不心得」というように、大半の兵隊も、自分が属さ

ない連隊のヨーフランなど聴いたことがなかったらう^{九三}。しかも、ヨーフランは「新古之区別も有之」と述べていることから、明治十年までに、ヨーフランが改正されたこと（そのため、混乱が生じていること）を示唆している。つまり、曾我や野津が批判しているのは、ラッパ暗号としては不適当な連隊のヨーフランを、総督本営が提示したことがある。

第四旅団の「日記」には、連隊のヨーフランが施行される前日の二十五日に、連隊のヨーフランではなく、別のラッパ暗号に変更することになったことが記されている。

喇叭号旗号共明二十六日ヨリ改正之義軍団本営ヨリ申越候間別紙相達候尤熊本地方ニ於テ喇叭暗号第一連隊第二連隊ノ譜ニ候得共当地屯在兵未タ習熟不致趣ニ付則別紙譜号ノ通り相改メ候条此旨相達候旨川村参軍ヨリ達シ別紙「丁白黒」「半日赤黒」問 第一大隊 答 第二大隊^{九四}

「熊本方面」では連隊のヨーフランだが、「当地」（第四旅団は鹿児島方面）では「問 第一大隊 答 第二大隊」を採用することにした。現場からのクレームを受け入れ、この変更を指示したのは川村純義^{九五}参軍で（この時期、別働第四旅団に同行していた）、翌日、二十六日に総督本営にこの変更を届け出た。

第四旅団が連隊のヨーフランの拒否したことに歩調を合わせたのか、同じ二十六日に第二旅団と第三旅団（熊本県南部に滞在）も大隊のヨーフランを採用することを、山縣有朋に通知している。事態を収拾するためか、六月三十日、総督本営は次のような通知を出した。

兼而相達置候喇叭暗号之義詮議之次第有之左之通り改定来ル七月十日ヨリ施行候条此旨相達候事

十年六月三十日

総督本営

熊本鎮台

問 右向 答 左向^{九六}

詮議の結果、ラッパ暗号は「問 右向 答 左向」（つまり、野津道貫が豊後路方面で使っていたラッパ暗号）に統一されることになった。これと同じ文書が、同日に第一旅団、別働第二旅団、別働第三旅団にも届けられている。大隊のヨーフランを採用した第四旅団や、第二、第三旅団に宛てた文書は残っていないものの、全軍に対する通知だったとみるのが妥当であらう。

七月八日、別働第一旅団が達書を紛失

新たなラッパ暗号「右向」「左向」が施行されるのは七月十日のはずであったが、その二日前、都城の南西にある白引^{モヒキ}における戦いで、またしても新たなトラブルが発生した。

去ル八日別働第一旅団モヒキノ戦ヒ利ナクシテ旗号喇叭号ヲ失ヒタリ依テ至急御改正アリタシ^{九七}

しかも、失ったのは「七月十日」ヨリ可施行喇叭暗号旗号等之達書^{九八}。そのものなのである。これに対処するために、高島鞆之助^{九九}少将は、別働第一旅団に限って一時的にラッパ暗号「問 止マレ 答 打方止メ」を用いることを川村純義に届け^{一〇〇}、川村は、総督本営に対し早急に改正することを要請した^{一〇一}。

十四日になって、改めて各方面に通知が届けられた。

兼而相定置候記号喇叭号遺失旨届出□□別紙之通り改正号此旨相達候事

十年七月十四日

征討総督本営

第一旅団

(…)

喇叭暗号

問 ガルダボー譜

答 ラツペル譜^{二〇一}

すでに説明をしたように、「ガルダボー」(GARDE-À-VOUS)は「気を付け」、「ラツペル」(LE RAPPEL)は「集合」を意味するラツパ信号である。この通知も、第一旅団だけでなく、同日に第二旅団、別働第二旅団にも届けられたことが確認でき^{二〇三}、また十六日には川村純義を經由して第四旅団の曾我、別働第一旅団の高嶋、別働第三旅団の大山巖少将^{二〇四}にも通知されているので^{二〇五}、全軍に対する一斉通知だったと思われる。

しかしながら、この「ガルダボー」「ラツペル」に対しても、クレームが寄せられた。七月十六日、鹿児島に加治木に滞在していた第二旅団の阿武素行^{二〇六}は、征討総督府参謀の小沢武雄^{二〇七}に次の電報を送っている。

ラツハヨヒキコウトモキウニアラタメニナリタシトノコトトイケムツケコタセマイエキゴウハトイホワニマウスコタイタテイチモムジミギノトリニテハイカガヤマタムゴウハナルベキタケミヤスクシテワカリヤスクセヨトノコトナレ^{二〇八}

〔喇叭及ヒ記号共急ニ改メニ成リタシトノ事問剣付ケ答ヘ前ヘ記号八問大輪ニ廻ス答ヘ堅一文字右之通ニテハ如何又暗号ハ成ヘキ丈ケ見安クシテ分リ安クセヨトノ事ナリ〕

阿武は「ガルダボー」(譜例7)「ラツペル」(譜例8)ではなく、「剣付」(譜例9)「前へ」(譜例10)のほうが良いのではないかと提案している。実際、楽譜を比較すると、「剣付」「前へ」はかなり単調なシグナルであるのに対し、「ガルダボー」は確かにメロディやリズムが複雑である(「ラツペル」は単調なシグナルだが)。ただ、阿武のこの提案が直

ちに聞き入れられた形跡はなく、「ガルダボー」「ラツペル」を施行することになった。

七月十七日、中田少尉試補の手帳と第二旅団の達書写の紛失

しかし、総督本営がラツパ暗号を「ガルダボー」「ラツペル」に改正



(譜例9) Règlement du 12 juin 1875 sur les manœuvres de l'infanterie, 1877.



(譜例7) Règlement du 12 juin 1875 sur les manœuvres de l'infanterie, 1877.



(譜例10) Règlement du 12 juin 1875 sur les manœuvres de l'infanterie, 1877.



(譜例8) Règlement du 12 juin 1875 sur les manœuvres de l'infanterie, 1877.

することを通知した七月十四日から、わずか三日後、またしてもラッパ暗号を記した手帳等を紛失する失態が——しかも、同日に二か所で——起きてしまう。

まず一件目は、豊後路方面の丸市尾（大分県佐伯市）における戦闘で、熊本鎮台の後備歩兵第四大隊第四中隊第四小隊長、中田平十郎（少尉試補）が戦死し、かれが所持していた手帳が敵に奪われた。豊後路方面では「ガルタボー」「ラツペル」を二十三日から施行する予定だったが^{二〇}、熊本鎮台司令長官の谷干城は、とりあえず二十三日までは暫定的に「喇叭暗号 臥声（ネロー）ヲ以テ問ヒ立声（ヲキロー）ヲ以テ答フ」^{二一}を使うように、第一旅団の司令長官、野津鎮雄^{二二}に伝えている。谷は、この失態に業を煮やし、怒り心頭だったのか、別の文書ではラッパ暗号を「各自之手帳ニ記載之義厳禁セシメ候」^{二三}と書いたほどである。

二件目は、正確な場所はわからないが、宮崎県の西南部（小林市から高原町のあたり）で、第二旅団の石本綱^{二四}少佐から、

記号喇叭譜改正云々御達書写並ニ相図旗黑白赤黒色筋宛昨十七日戦闘之際当大隊第二中隊ニ於テ落失致候^{二五}

と、第二旅団出張本営に報告が届いた。出張本営では参謀の今井兼利^{二五}が、第二旅団に限った暫定的なラッパ暗号として問「剣付」、答「前へ」を用いること（数日前に阿武から提案があったラッパ暗号をここで採用したか）を、司令長官の三好重臣に提案^{二六}。三好はすぐに山縣有朋に通知した^{二七}。

七月二十日、改めて総督本営は各旅団に宛ててラッパ暗号改定の通知を出している。

兼テ相定置候記号並喇叭暗号共於小林口御紛失致候旨届出候ニ付左之通改正候条此段相達候事

但シ旗雛型之義八去十四日付ヲ以テ相達候通

七月廿日

征討総督本営

各旅団

(…)

喇叭暗号

釵付ケノ譜

前へノ譜^{二八}

以上、五月末から七月中旬まで、ラッパ暗号を巡る数々の騒動を紹介してきた。

次から次へとトラブルが頻発し、ラッパ暗号は決して順調に運用されていたとは言えないが、うまく機能していたことを示す資料が、まったく残っていないわけではない。

簀笠ヲ被ルヲ以テ彼我分明ナラサルニ因リ喇叭ヲ以テ数回合図ヲナスモ更ニ応セサル而已ナラス突然緩歩行進スルモ景状奇怪ナルヲ以テ歩兵馳セテ之ヲ確認スルニ賊兵ナルニ因リ速ニ兵ヲ撒布シ追撃ス^{二九}

ラッパの「問」に対して、相手側からの「答」がなかったため、かれらは警戒を緩めることなく、冷静に対処することができている。

実際には、このような例のほうが圧倒的に多かったのかもしれないが、記録には残りにくく、逆に、ラッパ暗号の漏洩についての記録が多いのは、そこから生じるリスクが破格に大きいことを示しているのだろう。

明治十年のラッパ（西洋音楽）受容

西南戦争におけるラッパ暗号の騒動から判明したことを振り返りながら、明治十年当時の西洋音楽（ラッパ）受容について、いくつか考察しておきたい。

まず、敵・味方を識別するために「喇叭暗号」なるものが使われていたという事実は言つまでもないことだが、このラッパ暗号は、大尉、中尉、少尉（試補）ら、尉官の手帳に記されていた。前線で部隊を率いる

かれらは、当然ラッパ暗号を認識しておく必要があったはずだが、手帳に記さなければならなかった点に注目したい。つまり、かれらはラッパ暗号を頭の中に記憶していなかったことが、うかがえるのである。「ガルダボー」「ラツベル」であれ、「剣付ケ」「前へ」であれ、簡単に憶えられる単語で、それに対応するラッパのメロディも——例外はあるとしても——長年の軍隊生活で聴き慣れていたはずである。とはいえ、短期間のうちに、これほど改正が繰り返されたのであれば、手帳に記さざるをえなかったのも理解できる。しかし、敵に知られてはいけない暗号を紙媒体に書きとめることによって、逆に漏洩する危険がより高まってしまふという矛盾に突きあたってしまう。これは現代の私たちが、さまざまなパスワードやアカウントの管理に悩まされるのと似ているだろう。しかも、改正の際、急いで各地に通知をしようとしても、「達書」という紙媒体による伝達方法に頼らざるを得ず、それがさらなる漏洩のきっかけにもなった。

ところで、将校に命じられてラッパ暗号を吹いていたラッパ手たちは、紙媒体（手帳やラッパ譜）を持っていたのだろうか。この戦争ではラッパ手も多数戦死したが、ラッパ手が所持していた手帳やラッパ譜が奪われた、あるいは紛失したというような記録はみあたらない。訓練されたラッパ手であれば、当然、よく使用するラッパ譜なら記憶していたはずなので、わざわざ紙媒体を持ち歩くことはなかったようにも思える。だからこそ、憶えていない「第一連隊」のヨーフランを吹くことができなかったのだろう。かりに、ラッパ手が備忘のためにラッパ譜を所持していたとしても、そこに記されているのは個々のラッパ譜だけであり、具体的なラッパ暗号の「問答」は記されていなかったはずである。西南戦争前後のラッパ譜（野口吉右衛門、政府金助のラッパ譜）にも、さまざまなラッパ譜が収録されているが、ラッパ暗号という用法は、まったく記されていない。

では、この特殊な用法は、いつどこで誕生したのだろうか。今回の対象とした資料を今一度調べてみると、五月八日に、

当隊喇叭手今度暗号二相成候第一大隊第三大隊之ライフラン譜未タ
承知無之ニ付^{三〇}。

という、別働第二旅団の屯田遠征隊（堀基^{三三} 准大佐）からの連絡と、同じ五月八日に、別働第四旅団のある隊からの、

当隊喇叭手「ヨルフラン」譜八承知致居候得共「ライフラン」譜承
知致居候者無之候此段御届申候也^{三三}

というクレームが初出（どちらもラッパ暗号として「ヨルフラン」ではなく、「ライフラン」と書かれた通知を受け取ったものの、これが誤字であることに気づかず、「ライフラン」など知らない困惑しながら返信をしている）、遅くとも五月初旬にはラッパ暗号が存在していたことが判る。

別働第三旅団の記録『西南戦闘日誌』の四月八日の項目には、

参軍各旅団長ヲシテ暗号ノ用否及ヒ合旗ノ改否トヲ議セシメ又各旅
団長会議規約ヲ定メ各意見ヲ陳セシム^{三三}

とあるが、ここでのいう「暗号」が、ラッパ暗号かどうかは確証が持てない。いずれにせよ、西南戦争の前半、たとえば、三月の田原坂の戦いの頃には、ラッパ暗号はまだ存在しなかったのかもしれない。さらに想像力を働かすことが許されるなら、そうした激戦において、味方を誤射してしまうような事故が発生したことへの反省を踏まえて、現場で編み出された応急処置だったようにもみえる。上層部が、必ずしも全てのラッパ手が吹奏できるとは限らない「第一連隊」のヨーフランを選択してしまったり、「もつ少し易しいラッパ譜にしてはどうか」と逆提案を受けたりしている杜撰なところからも、陸軍が事前に入念な準備をしていたとは思えないからである。

他方、「第一連隊」のヨーフランのように吹けないレパートリーは

あったものの、ラッパ手はその数多くのラッパ譜を吹奏していたらしいこと、目まぐるしく変更されるラッパ暗号にも、おおよそ対応できていたであろうことも、否定できない。それは明治維新以来のラッパ教育の成果といえるだろう。

ここで紹介した「喇叭暗号」を巡る数々のトラブルは、アジア歴史資料センターのデジタルアーカイブの資料のなかに多数含まれているが、明治二十年に刊行された参謀本部陸軍部編纂課『征西戦記稿』^{二四}には、ほんのごくわずかに記載されていない^{二五}。『征西戦記稿』は、西南戦争時に残された膨大な記録に基づいて編纂されたはずなのだが、西南戦争を、総合的、俯瞰的な観点から判断して編纂したのであれば、ラッパ暗号など些細なことに過ぎず、紙幅の都合で省かれたとしても、仕方がない。だが、少し邪推をするなら、陸軍にとって都合なファクトを隠蔽したようにも見えなくもない（西南戦争後、陸軍がラッパ暗号を使っていたという話は、寡聞にして知らないの、やはり失敗と認識されていたのだろうか）。しかしながら、アジア歴史資料センターのようなアーカイブに、公文書として管理・公開されていれば、百年以上が経過した後であっても、きちんと検証することができる。

本稿は、政府側の資料から読み取れる陸軍のラッパを対象としてきたため、薩摩軍が用いたラッパについては扱うことができなかった^{二五}。最後に、政府側の資料に残った珍しい事例（八月一日）を一件だけ紹介しておく。

賊ノ梓峠辺ニ屯駐スル者佛式喇叭ヲ以テ我兵ヲ混乱セントス諸口兵
ニ注意セシム^{二六}

つまり、薩摩軍が、フランスのラッパ譜を吹いて政府陸軍を攪乱しようとしたことが記されており、薩摩軍のラッパ手も、政府陸軍のラッパ譜を誦んじていたことがよくわかる^{二七}。

ラッパが軍隊・戦争の必需品になったことによって、日本人ラッパ手がヨーロッパの金管楽器をつかって「ドミン」のメロディを吹奏し、兵

士たちは——唱歌教育が始まる前に——その「ドミン」を毎日のように耳にしていた（しかし、こうした兵士たちの「西洋音楽受容」は、あまり考慮されない）。それに伴って、金管楽器を製造する産業も盛んになった（しかし、日本における西洋楽器製造の歴史は、ピアノやヴァイオリンに注目が集まりがちである）。そうしたことが、西南戦争の資料を丁寧に分析することによって、より明瞭に確認できるのである。

* 本研究は文部科学省科学研究費、基盤研究（C）「明治前期の日本の信号ラッパ―英仏の影響と西南戦争における運用の実態について―」（19K00158）の成果の一部です。

参考文献

- 安藤定編『別働第二旅団戦記』（一八八七）
勇知之「西南戦争と洋楽 近代吹奏楽のルーツと日本軍の興亡」『歴史読本』四十八（二〇一〇）七六〇号（二〇一〇年三月）、二〇六～二一頁。
小笠原正道「西南戦争 西郷隆盛と日本最後の内戦」（中央公論社二〇〇七）
奥中康人『陸海軍喇叭譜』（一八八六）制定以前の陸軍フランス式ラッパ譜について』『静岡文化芸術大学研究紀要』第十九巻（二〇一九年三月）四十九～六十七頁。
奥中康人「明治初期の金管楽器製造について」国立公文書館アジア歴史資料センター所蔵文書の分析を中心に』『静岡文化芸術大学研究紀要』第二〇巻（二〇二〇年三月）、五十一～七十二頁。
旧別働第三旅団参謀部『西南戦闘日誌』（畏三堂一八八四）
参謀本部陸軍部『征西戦記稿』（書潮社一九八七）
長田順行「西南の役と暗号」（朝日新聞社一九八九）
山口常光『日本ラッパ史』（一九七二）
横田庄一郎『西郷隆盛惜別譜』（朔北社二〇〇四）
陸上自衛隊第八混成団本部『新編西南戦史』（一九八二）
和歌山県史編さん委員会『和歌山県史 近現代』（一九八九）

一 奥中康人『陸海軍喇叭譜』（一八八六）制定以前の陸軍フランス式ラッパ譜について（二〇一九）

二 国立公文書館アジア歴史資料センター <https://www.jacar.go.jp/>
三 「喇叭」だけでなく、類似する単語「ラッパ」「ラッパ」「ラッパ」等、あるいは誤記と考えられる「喇叭」「喇叭」等でも検索をした。また、ラッパの存在を示唆する「吹」「奏」「吹奏」「音号」のような関連語でも検索をしている。

四 キーワード検索は、その資料に付けられたタイトルと、検索結果に表示される「概要」欄の「内容」に翻刻されている資料の冒頭一頁（約一〇〇〇文字程度）部分のみを対象とするだけで、「全文検索」ではない。したがって、「喇叭」等の文字が資料の後半に記されている「内容」には翻刻されていない場合は、「ヒット」にならない。

五 翻刻されている「内容」について注記しておく、この翻刻には誤りが多々あるため、本稿に引用する際には適宜修正している。それゆえ、本稿での引用文と、デジタルアーカイブ上の翻刻の字句は必ずしも一致しない。元の資料を参照する際には、レファレンスコード検索を推奨する。

六 たとえば、「戦闘報告表 6月24日谷山」JACAR（アジア歴史資料センター）：Ref. C09082218900（以下「J11桁の数字」は、アジア歴史資料センターのレファレンス番号を示す）。

七 たゞ、C09082280300「8月18日 於江の嶽戦闘報告書 平賀大尉」
八 実際に、明治十年に作成された（日付に「明治十年」と記載されている）資料であるにもかかわらず、明治十一年の文書として登録されているものが多数あるが、本稿ではそうした文書も含めている。

九 書状を出した側の控えと、受け取った側の控えが残ることで、内容的に同一の文書が重複していることもある。
十 多くの資料は簿冊になっており、その表紙裏には「昭和33年4月米政府返還旧日本軍記録文書等史料経歴票」が貼り付けられている。

十一 奥中康人「明治初期の金管楽器製造について」（二〇一〇）
十二 可児春琳（一八四七～一九一〇）、旧大垣藩士。戊辰戦争に参加。廃藩置県後に陸軍に

入り、日清・日露戦争で数々の武功をあげ、陸軍少将となった。

十三 斎藤正言、愛媛出身。陸軍省の第二局第一課長。

十四 C09081949300「本日電報の件 可児中尉」

十五 滋野清彦（一八四六～一八九六）、旧長州藩士。奇兵隊に入り戊辰戦争に従軍。陸軍省の第一局次長、第三課長。明治十五年、陸軍少将。歩兵第四旅団長、陸軍士官学校長などを歴任。三男は東京音楽学校卒の飛行家、滋野清武。孫はジャズピアニストの滋野清鴻。

十六 渡辺久、旧土佐藩士。陸軍省の卿官房副長。明治十九年に陸軍少将、歩兵第四旅団長。C09080873400「5月29日喇叭10管読法敬礼式陣中軌典等御送度有 斎藤少佐」

十七 C09081947100「送達証 歩兵ラッパ10管」

十八 井田讓（一八三八～一八九九）、旧大垣藩士。藩主戸田氏彬の侍読、西洋流砲術教授方をつとめる。維新後に生野県権知事、久美浜県知事、長崎県知事等を経て、明治四年陸軍少将。西南戦争では山縣有朋に代わって、陸軍卿代理をつとめ、新選旅団の編成にあたった。

十九 C09080694600「6月24日喇叭外3点の儀に付同 東伏見少将」

二十 C0908020000「普式喇叭代金と和歌山県出張会計部へ御廻の件 関中佐宛」

二十一 中川審六郎（一八四六～一九〇六）、旧和歌山藩士。紀州徳川家の家令。和歌山藩時代には、歩兵連隊長をつとめる。明治十年六～七月に、政府陸軍の壮兵召募に従事。明治二十三年、和歌山県参事局。

二十二 C09081208600「8月14日戊辰第434号遊撃第6大隊喇叭の件 中川中佐」

二十三 奥中康人「明治初期の金管楽器製造について」五五～五六頁。

二十四 鳥尾小弥太（一八四八～一九〇五）、旧萩藩士。明治三年に和歌山藩に招かれて軍制改革にあたったあと、兵部省に出仕。軍務局長、大阪鎮台司令長官を経て中将に。西南戦争後には枢密顧問官、子爵。

二十五 「和歌山県史 近現代」五十三～五十五頁。

二十六 「和歌山県史」には、召募に応じた川角梅之助（旧和歌山藩時代にはラッパ手だったが、西南戦争でラッパを吹いたかどうかは不明）の戦死記録が掲載されている。「初メ和歌山藩ニ於テ鼓手長タリ後喇叭隊長タル十一年鹿兒島ノ役起ルヤ出デ、壮兵募集に應ジ遊撃隊ニ編セラレ軍曹ニ命セラル」八月十八日向国濱子村ニ戦死ス享年二十六歳」（和歌山県史案（第2編）和歌山史稿本 制度 兵制（明治8～11年）国立公文書館デジタルアーカイブ）

二十七 C04027410800「本より12掲空弾等支廠へ送致同」

二十八 C04026964700「東京裁判所より清水駒蔵訴訟に付云々」

二十九 永持明德（一八四五～一九〇四）、旧幕臣。幕府遣欧使節団に随行。大砲差図役頭取。維新後は沼津兵学校教授を経て大阪兵学校に。退役後、私立育英堂農業科（東京農業大学の初代学長に就任）。

三十 C04027283300「6月喇叭製作の義に付同」

三十一 C09082113700「東京鎮台第3連隊第3大隊第一中隊一等喇叭卒 近藤與久治」

三十二 C09082114100「東京鎮台第3連隊第3大隊第一中隊一等喇叭卒 佐藤六之助」

三十三 C09083966500「開戦以来戦闘景況書 明治十年五月 第八連隊第三大隊合併第一中隊 元第 中隊」

三十四 C0908520500「抜刀隊と歩兵の勇悍なる者を以て激戦すと雖も取る能はず」

三十五 C09083966500「開戦以来戦闘景況書 明治十年五月 第八連隊第三大隊合併第一中隊 元第一中隊」

三十六 C0908670600「10年2月27日午後我が軍新たに部署を定む」

三十七 C09086913100「7月5日旅団司令長官代理」

三十八 C09085157000「7月10日本日より可施行喇叭暗号旗号等の達書紛失御届 川村参

軍」

三十九 C09085157000「7月10日本日より可施行喇叭暗号旗号等の達書紛失御届 川村参

軍
四〇 CO9085946100 「7月5日 東伏見司令長官本日午後當御入来告諭等の件」
四二 CO9083770400 「仮定暗号 旗号 喇叭暗号」
四二 CO9083770400 「仮定暗号 旗号 喇叭暗号」
四三 CO9082818400 「6月22日 喇叭暗号の義本日17御達の趣本日到着云々 野津大佐」
四三 CO9082818400 「6月22日 喇叭暗号の義本日17御達の趣本日到着云々 野津大佐」
四四 CO9083146300 「暗号及び記号の変更について 小澤大佐」
四六 CO9085485600 「9月10日 山田旅団の合図旗及喇叭問答の仮決定に関する通達 山田少将」
四七 CO9085945200 「7月3日 日課左の通相定（午前4時起床諸日課午後9時消燈）」
四八 CO9084743600 「3月13日 佐久間盛義曹長少尉試補申付候事」
四九 CO9082858300 「記号」
五〇 CO9082858300 「記号」
五一 CO9084582900 「5月23日 2中隊を以て茂田村賊撃攻撃に付申進 高島少佐より」
五二 「フーラン」あるいは「アルフアン」「ラフロラン」がフランス語のアルファンであることは、井上由里子氏のご教示による。またフランスのラッパ譜については、アクセル・シャノン氏、クララ・ヴァルテル・サカモト氏にご教示いただいた。
五三 野口吉右衛門（一八五二〜？）、埼玉県出身。明治八年五月に東京鎮台歩兵第二連隊第三大隊第三中隊のラッパ手となり、西南戦争に従軍した（別働第一旅団）。
五四 政府金助（一八六七〜？）、岡山出身。明治十七年六月、陸軍教導団歩兵科喇叭生徒となり、明治十八年九月に卒業。同月、名古屋鎮台歩兵第十八連隊第三大隊の喇叭長になった。
五五 もともと、激しい戦闘の様子を描写する報告として、一種の常套句のように（実際にはラッパの音が無かったとしても）「進撃ノ号音ト共ニ呐喊」のように、記しているケースもあるかもしれない。
五六 ラッパ譜のような楽譜集の場合、そこに様々な曲が収録されていたとしても、実際にそのすべてが吹奏されたとは限らない。しかし、このような戦時の文書であれば、少なくとも、タイトルが記された曲は実際に吹奏していたことになる。
五七 高嶋信茂、広島県出身。大阪鎮台幕僚参謀部の参謀副長。西南戦争では別働第二旅団。
五八 中村重遠（一八四〇〜一八八四）、高知県宿毛市出身。戊辰戦争で宿毛機勢隊を編成し転戦。維新後、陸軍に入る。広島鎮台幕僚参謀部の参謀長。西南戦争では別働第三旅団の参謀長。名古屋城、姫路城の保存を上申したことで知られている。
五九 山内通義（一八五〇〜一九二二）、旧長州藩士。東京鎮台工兵第一大隊長。西南戦争では別働第二旅団。陸軍砲工学校の初代校長。
六〇 山川浩（一八四五〜一八九八）、旧会津藩士。慶応二年に樺太国境議定のための幕府使節団に加わり、ヨーロッパ経由でロシアに渡る。戊辰戦争後は、斗南藩権大参事。鹿藩置県後に陸軍省に入る。西南戦争では別働第一旅団の参謀。弟に山川健次郎、妹に大山捨松がいる。
六一 CO9085272200 「6月16日 当方面受持戦闘線内に於て喇叭の諸音演習の件 中村中佐外」
六二 名古屋鎮台歩兵第六連隊のラッパ手が所持していたラッパ譜「喇叭記帳」（明治十八年十月の日付がある（静岡文化芸術大学所蔵））にも「坂丸そ」が収録されている。
六三 野口吉右衛門のラッパ譜は、AUX CHAMPS EN MARCHANTと同じメロディの曲に、「カスケット」「LA CASQUETTE」と同じタイトルが付けられている。
六四 長田順行「西南の役と暗号」三十七〜四十五頁。
六五 CO908209700 「7月23日 都城より美々津に至る戦闘報告並に部署及賊情探偵書類／坪屋の賊徒昨夜潰走ニ好少将」
六六 村田成礼（？〜一八七七）、旧弘前藩士。別働遊撃第一中隊長。

七〇 CO4027834100 「明治10年「大日記 6月1日 甲軍団本営」(p.62)」
六八 堀江芳介（一八四五〜一九〇二）、旧長州藩士。奇兵隊に入り戊辰戦争に従軍。西南戦争では別働第二旅団の参謀。この時、堀江は別働第二旅団の本隊から離れ、豊後地方で熊本鎮台兵を率いていたとみられる。明治十八年、陸軍戸山学校校長。
六九 三浦梧村（一八四七〜一九二八）、旧萩藩士。広島鎮台司令長官として秋の乱を鎮圧。西南戦争では第三旅団司令長官。日清戦争後、朝鮮特命全權公使として韓国に駐在。閔妃殺害事件を起こした。
七〇 CO9084900100 「6月8日 軍団本営電報 記号並に喇叭号賊に奪はれるに付通知」
七一 CO9084900000 「6月8日 軍団本営電報 記号並に喇叭号賊に奪はれるに付通知」
七二 六月十三日になって、第二旅団の三好重臣は山縣有朋に対して「是迄相用來候記号及喇叭暗号豊後路ニ於テ賊ニ相漏候云々去ル八日電報ヲ以テ御達之趣敬承仕候然ルニ其後改正之分未タ何等御達無之ニ付」と催促していることから、しばらく、新しいラッパ暗号の通知はなかったらしい。
七三 山田鎮義（一八四四〜一八九二）、旧萩藩士。岩倉使節団に随行。西南戦争後は司法卿法相を歴任。日本法律学校（後の日本大学）を創立。
七四 CO9084585600 「6月10日 山田旅団の合図旗及喇叭問答の仮決定に関する通達 山田少将」
七五 三好成行（一八四五〜一九一九）、旧萩藩士。奇兵隊小隊長司令。明治四年、陸軍少尉。日清・日露戦争にも出征。
七六 牧野毅（一八四五〜一八九四）、旧松代藩士。佐久間象山に砲術を学ぶ。明治七年、参謀局勤務。西南戦争では第三旅団参謀。
七七 川村景明（一八五〇〜一九二六）、旧薩摩藩士。薩英戦争、戊辰戦争に従軍。日清戦争では近衛歩兵第一旅団長。日露戦争では第十師団長をつとめる。明治十八年に陸軍大将、大正四年元帥。
七八 CO9084585700 「6月10日 合図旗及喇叭問答の仮決定に関する山田少将通達の通知 高島少佐」
七九 「同伏せ」の「同」が何を指すのかは、文脈的に考えれば「散兵ノ内」あるいは「散兵ノ内半分隊」かもしれないが、「散兵ノ内伏せ」や「散兵ノ内半分隊伏せ」では意味が通らないので、「散兵伏せ」と考えるのが妥当だろう。
八〇 CO9085244400 「6月13日付」
八一 小郷武、高知出身。広島鎮台第十二連隊第二中隊。
八二 「別働第二旅団戦記」巻之四、二二一〜二二二頁。
八三 CO9085481700 「6月13日 三浦旅団に於ける旗喇叭暗号の決定に関する通知 三浦少将」。山田は山縣に対して「互方面限リ」と述べているので、人吉方面にいた別働第二旅団と第三旅団同じラッパ暗号で統一したと思われる。ただ、三浦は「当団（第三旅団）限リ」と言っているのので、別働第二旅団は別のラッパ暗号だった可能性もある。
八四 三好重臣（一八四〇〜一九〇〇）、旧萩藩士。西南戦争では第二旅団の司令長官。
八五 川路利良（一八三四〜一八七九）、旧薩摩藩士。フランスの警察制度を参考に、日本に近代警察制度を導入。初代大警視をつとめる。西南戦争では臨時に少将を兼任し、別働第三旅団司令長官。
八六 CO9084908000 「喇叭暗号記号共別紙の通相定相達総督本営」
八七 曾我祐準（一八四四〜一九三三）、旧柳川藩士。西南戦争では第四旅団の司令長官。
八八 CO908640800 「6月20日 喇叭暗号記号の義に付可申出御達の件 曾我少将」
八九 野津道貫（一八四一〜一九〇八）、旧薩摩藩士。西南戦争では第二旅団の参謀長だが、五月下旬より豊後地方に出張していた。日清戦争では第一軍司令官。兄は野津鎮雄（第一旅団司令長官）。
九〇 CO9083766200 「野津大佐豊後地方相定暗号記号等の儀」

九〇 CO9082818400 「9月22日 喇叭暗号の義本日17御達の趣本日到着云々 野津大佐。つまり、豊後方面では、村田大尉の手帳が奪われた後の六月上旬は、問「右向ケ」答「左向ケ」というラッパ暗号を口・カ・ルに使っていたことが、この資料から判明する。

九二 曾我祐準は、陸軍内の山縣有朋・大山巖らの藩閥勢力に対して反主流派を形成していたので、とにかくケチをつけたかったのかも知れない。

九三 四月十五日に、熊本城に接近した歩兵第十四連隊（第一大隊第二中隊）は、城中ノ兵多ク我ヲ狙撃シ容易ニ近クヲ得ヌ喇叭ヲ以テ止発ヲ促スモ更ニ応セス連隊ノ記号ヲ吹奏シ初テ入城スルヲ得タリ」（CO9080691400）とあり、「連隊ノ記号」つまり「歩兵第十四連隊のラーフラン」を吹奏することで味方であることを認識させている。ただし、認識できたのは、歩兵第十四連隊が熊本鎮台に属すること、熊本城内に歩兵第十四連隊の別の部隊がいたことに依るものであり、誰もが歩兵第十四連隊のラーフランを聞き分けることができたことを示すものではない。

九四 CO9084971700 「9月25日 指揮無之人家へ放火不都合部下へ説諭達 川村参軍、CO9084971800 「9月26日 進撃に付医官出張の纏帯所等支病院と協議取極の件」

九五 川村純義（一八三六～一九〇四）、旧薩摩藩士。明治維新後に海軍の整備に尽力。西南戦争では参軍として海軍を率いる。明治十一年に海軍卿。

九六 CO9084483800 「9月30日 喇叭暗号詮議の次第左の通り改定 総督本宮」

九七 CO9083051900 「旗号ラッパ号の改正要求 本宮」

九八 CO9084974500 「7月11日 8日清水に於て米30俵分捕9日戦闘なし降伏生捕13名」

九九 CO9084974600 「大溝原より中央久藤附近進撃該堡を陥す三好少将報知」

一〇〇 CO9084974600 「大溝原より中央久藤附近進撃該堡を陥す三好少将報知」

一〇一 CO9084974600 「大溝原より中央久藤附近進撃該堡を陥す三好少将報知」

一〇二 CO9084974600 「大溝原より中央久藤附近進撃該堡を陥す三好少将報知」

一〇三 CO9084974600 「大溝原より中央久藤附近進撃該堡を陥す三好少将報知」

一〇四 CO9084974600 「大溝原より中央久藤附近進撃該堡を陥す三好少将報知」

一〇五 CO9084974600 「大溝原より中央久藤附近進撃該堡を陥す三好少将報知」

一〇六 CO9084974600 「大溝原より中央久藤附近進撃該堡を陥す三好少将報知」

一〇七 CO9084974600 「大溝原より中央久藤附近進撃該堡を陥す三好少将報知」

一〇八 CO9084974600 「大溝原より中央久藤附近進撃該堡を陥す三好少将報知」

一〇九 CO9084974600 「大溝原より中央久藤附近進撃該堡を陥す三好少将報知」

一一〇 CO9084974600 「大溝原より中央久藤附近進撃該堡を陥す三好少将報知」

一一一 CO9084974600 「大溝原より中央久藤附近進撃該堡を陥す三好少将報知」

一一二 CO9084974600 「大溝原より中央久藤附近進撃該堡を陥す三好少将報知」

一一三 CO9084974600 「大溝原より中央久藤附近進撃該堡を陥す三好少将報知」

一一四 CO9084974600 「大溝原より中央久藤附近進撃該堡を陥す三好少将報知」

一一五 CO9084974600 「大溝原より中央久藤附近進撃該堡を陥す三好少将報知」

一一六 CO9084974600 「大溝原より中央久藤附近進撃該堡を陥す三好少将報知」

一一七 CO9084974600 「大溝原より中央久藤附近進撃該堡を陥す三好少将報知」

一一八 CO9084974600 「大溝原より中央久藤附近進撃該堡を陥す三好少将報知」

一一九 CO9084974600 「大溝原より中央久藤附近進撃該堡を陥す三好少将報知」

一二〇 CO9084974600 「大溝原より中央久藤附近進撃該堡を陥す三好少将報知」

一二一 CO9084974600 「大溝原より中央久藤附近進撃該堡を陥す三好少将報知」

一二二 CO9084974600 「大溝原より中央久藤附近進撃該堡を陥す三好少将報知」

一二三 CO9084974600 「大溝原より中央久藤附近進撃該堡を陥す三好少将報知」

一二四 CO9084974600 「大溝原より中央久藤附近進撃該堡を陥す三好少将報知」

一二五 CO9084974600 「大溝原より中央久藤附近進撃該堡を陥す三好少将報知」

一二六 CO9084974600 「大溝原より中央久藤附近進撃該堡を陥す三好少将報知」

一二七 CO9084974600 「大溝原より中央久藤附近進撃該堡を陥す三好少将報知」

一二八 CO9084275000 「7月19日 記号喇叭暗号共落失の旨届出の件 今井中佐」

一二九 CO9082858500 「7月19日 去る14日付を以て改正連相成記号及びラッパ暗号 三好少将」

一二〇 CO9082860300 「兼て相定めたる記号並にラッパ暗号の件 総督本宮」

一二一 CO9080759500 「10年7月25日 右翼山ノ口山上築城 同所宿泊」

一二二 CO9085358400 「5月8日 第一大隊第三大隊のライフラン 諸其筋へ御下命相成様 依頼 堀大佐」

一二三 堀基（一八四四～一九二二）、旧薩摩藩士。慶応二年、函館の樺太境界交渉の際に現地を視察し、坂本龍馬らに北門警備の急務を説く。開拓中判事、北海道屯田事務局局長。北海道運輸会社を興した。

一二四 CO9085374400 「5月8日 当隊喇叭手「ライフラン」 諸承知致居者無之御届 第4連隊第2大隊第3中隊」

一二五 旧別働第三旅団参謀部『西南戦闘日誌』四十三頁。

一二六 筆者（奥中）が確認した限りでは、六月十二日の小郷大尉手帳紛失（巻四十、三十八頁、六月十七日のラッパ暗号改正通知（巻四十五、二頁）、七月十三日の「剣付」「前へ」への改正（巻五十五、三十頁）、八月六日の「喇叭査問」（巻五十七、二十九頁）、六月二十六日のラッパ暗号改正について（附録「軍中雑録」の十頁）が記載されているが、本稿で示したような詳細な経緯は記されず、単に事実を述べるにとどまっている。

一二七 横田庄 郎によると、田原坂資料館には「鹿児島集成館」の刻印がある薩摩軍のラッパが収蔵されているという（横田（二〇〇四））。

一二八 CO908068300 「10年8月1日 梓峠の賊兵の陽動に対する注意」

一二九 勇知之（西南戦争と洋楽（二〇〇三））は、薩摩軍のラッパ手が政府軍のフランスのラッパ譜を吹いた例として、堀地源一郎が三月下旬に現地から報じた「六時半には早く薄暗くなりしに本営より（二）俣山の東北に當りて頻りに喇叭の声を聞く其譜は佛蘭西の急変を報ずる譜にて即ち我が陸軍に用ふる処なれども其音は何となく異様に響き賊兵が用ふる英吉利製の喇叭の音の如し」（堀地源一郎「戦報採録」『東京日日新聞』明治十年三月二十九日）を挙げていますが、堀地は、この数十行後に「初め喇叭を吹きたるは即ち近衛兵の持場にて戦中に急を知らせたるなり」とも述べているので、厳密に言えば、薩摩軍が吹いた事例ではない。とはいえ、政府軍がそのような陽動作戦を警戒していたことは間違いない。

一二六 CO908068300 「10年8月1日 梓峠の賊兵の陽動に対する注意」

一二七 勇知之（西南戦争と洋楽（二〇〇三））は、薩摩軍のラッパ手が政府軍のフランスのラッパ譜を吹いた例として、堀地源一郎が三月下旬に現地から報じた「六時半には早く薄暗くなりしに本営より（二）俣山の東北に當りて頻りに喇叭の声を聞く其譜は佛蘭西の急変を報ずる譜にて即ち我が陸軍に用ふる処なれども其音は何となく異様に響き賊兵が用ふる英吉利製の喇叭の音の如し」（堀地源一郎「戦報採録」『東京日日新聞』明治十年三月二十九日）を挙げていますが、堀地は、この数十行後に「初め喇叭を吹きたるは即ち近衛兵の持場にて戦中に急を知らせたるなり」とも述べているので、厳密に言えば、薩摩軍が吹いた事例ではない。とはいえ、政府軍がそのような陽動作戦を警戒していたことは間違いない。

The confusion caused by "bugle sign": Focusing on usage of the bugle call in the Army during the Seinan War of 1877

OKUNAKA Yasuto

Department of Art Management, Faculty of Cultural Policy and Management

The purpose of this paper is to analyze the usage of the Army's bugle call related to the Seinan War of 1877, by searching the digital archive of Japan Center for Asian Historical Records, National Archives of Japan. Approximately 320 data extracted by searching the archive with keywords such as "Rappa" can be classified into data on bugles as musical instruments, bugle player, and bugle call. Focusing on the bugle call in particular, it is found that many French bugle calls and marches were used, and that there was a special usage called "bugle sign".

Bugle sign was communication for identifying an enemy or an ally by exchanging a predetermined bugle call in a question-and-answer format. However, many records show that bugle sign and countersign fell into the hands of the enemy and had to be revised many times. Although there were problems with the operation of the bugle sign, the bugler generally played a large number of bugle calls, suggesting that the bugle education has been successful since the Meiji Restoration.